

地区ソヴィエトへ!!

—生産点・学園・地区—

シンポジウム

旭凡太郎 (労働運動研究者)
西田 輝 (東京都西部地区反帝戦線)

法学部闘争委員会 BUND

5月30日 PM 4:30 2番教室

我々は、自分達の生きている現代と完全に同時代にいることはない。歴史は仮面をつけて進行する。歴史は前の場面の仮面をつけたまま次の場面に登場するのだが、我々はもうその芝居がさっぱり解らなくなる。レジス・ドブレ「革命の中の革命」さきあげたドブレの言を待つまでもなく、我々の所有する「現在」は仮面劇である。そうさくする事象はしばしば現象と本質を転倒させてしまう。そうして我々はただ単に時間を運んで行く「時間の殻」(マルクス)になってしまうという訳だ。特に、いままで巨大で絶対的なものに見えた体制が、その存立の意味と根拠を根底から問い直される過渡期にあっては、或る者はバラ色の退廃をふりまき、また或る者は灰色の虚無(そう、それは決して黒色まで下向し得ぬ)にひたりながら、「殻」になって行く。我々は、明確に「未来」の深さと広さを認識する。パースペクティブで過渡期を場所的立場として定立させなければならぬ。それは、「あやまって戦えば自滅し、戦わなければ退廃する」状況である。67年10・8羽田闘争によって切り開かれた先進国に於ける実力闘争の質を我々は「国際主義」と「組織された暴力」とに総括した。68年には、ベトナム革命戦争に呼応し、防衛庁—新宿10・21闘争における暴力闘争を明確に復権する。しかしながら現在、西独学生運動の分裂、仏全学連の崩壊、米反戦闘争、黒人運動の停滞、日本に於ける全共闘運動の一定の後退と、全世界的にみても新左翼は厚い壁に突きあたっている。或るブルジョア学者は、先進国に於いては、(霞ヶ関ビルのように)震動が起ってもそれを吸収してしまう構造、即ち「矛盾構造」の社会だからとしたり顔に忠告している。ブルジョア学者らしい言葉だ。しかし彼に対して、我々は一つの積極的な評価を与える必要がある。それは彼

が「震動」を吸収する構造を先進国の市民社会が有していると指摘しているからだ。社会経済機構における「学園」に規定された学生運動は、ラジカリズムが小ブル的に自己目的化してしまう。全共闘に組織的飛躍が問われた10、11月闘争以前に、(勿論、権力による武装解除が主因であるが)自己の内部から崩壊してしまった部分も多い。例えば、戯画的に共産主義社会に於いて想定されるフリーセックス、共同生活を闘争の中に持ち込む近代合理主義—ブルジョア倫理に、即目的に「共産主義的」「プロレタリア的」を対置しても、それは自己の小ブル性に短絡した奇型なものでしかない。かかる様に、資本の論理は、反抗を分断化し、或る部分は不必要に強くしたりして、力学的に震動を吸収してしまう。まさに我々が突き当たった課題—自国帝国主義打倒/安保粉砕/が高度に政治闘争に耐え得る組織を要求したのに対し、我々は資本の論理に規定された組織でしか闘えなかったのだ。地域の住民大衆との結合を/権力を持たないものは空間—地域を占有することができる/「資本の論理」を打破し、「地区」への組織の再編成を/このことを佐世保・王子闘争の教訓を例に旭凡太郎氏は「現代帝国主義と70年安保」という論文で次の様に言っている。「我々がこれまでに見たこともない国家権力の密集した反革命の全土を覆う登場を引き出す時、労働者人民は資本の棒・生産点の棒を越えた存在そのものの動揺を開始し、密集した反革命を我々が部分的ではあれ打ち破り始めるや、その資本・職能を越えた国家権力に対する団結は、街頭暴力闘争を展望した地域的結集—職能を越えた蜂起を準備する、全人民的な地区ソヴィエト運動において集約されなければならないことを佐世保・王子は確認させた。」



グループで団らんできる

音楽喫茶

Pony

大型カラーテレビ
生ビール

明大前南口際 TEL (321) 3872